

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第217集

荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡第1次発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡第1次発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成5年度の岩手県教育委員会のまとめでは8,700箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりましたバイパス建設事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、一般国道4号金田―バイパス建設事業に関連して平成5年度に発掘調査を実施した二戸市荒田Ⅲ・荒田Ⅳの2遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は馬淵川左岸の河岸段丘上に立地し、今回の第1次調査によって縄文時代の狩場跡や平安時代の集落跡であることが明らかになり、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望します。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成6年6月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 佐々木 浩

例 言

1. 本報告書は、二戸市^{にのへし}金田^{きんた}一字^{いちご}荒田^{あらかた}に所在する^{そざんする}荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡^{あらかたⅢ・あらかたⅣいせき}の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道4号金田一バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号は荒田Ⅲ遺跡が I F - 80.1095、荒田Ⅳ遺跡が I F - 80.1096 調査略号は各々 A T Ⅲ - 93、A T Ⅳ - 93 である。
4. 発掘調査は 1993 年度に実施した。各々の調査期間及び調査面積は次の通りである。

荒田Ⅲ遺跡	1993年8月18日～9月31日	2,054㎡
荒田Ⅳ遺跡	1993年8月18日～9月31日	260㎡
5. 発掘調査は、羽柴直人、鎌田 勉が担当した。
6. 報告書の作成は鎌田 勉が担当した。
7. 検出された遺構の種類と遺構数は次の通りである。

平安時代の竪穴住居跡	1棟	縄文時代の陥穴状遺構	2基	土坑	3基
溝	1条	柱穴状の土坑	26基		
8. 調査に際しては二戸市教育委員会関 豊氏のご協力をいただいた。
9. 調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序 例言

本 文

I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の地形	5
3. 周辺の遺跡	5
4. 基本順序	8
III. 調査方法と整理方法	10
1. 野外調査	10
2. 室内整理	10
IV. 検出された遺構と遺物	15
1. 荒田Ⅲ遺跡	15
(1) 1号竪穴住居跡	15
(2) 1号土坑	19

(3) 2号土坑	19
(4) 1号陥穴伏遺構	20
(5) 2号陥穴伏遺構	21
(6) 遺構外出土遺物	22
2. 荒田Ⅳ遺跡	23
(1) 1号土坑	23
(2) 1号溝	23
(3) 柱穴伏土坑群	23
(4) 遺構外出土遺物	26
V. まとめと考察	27
1. 荒田Ⅲ遺跡	27
2. 荒田Ⅳ遺跡	28

図 版

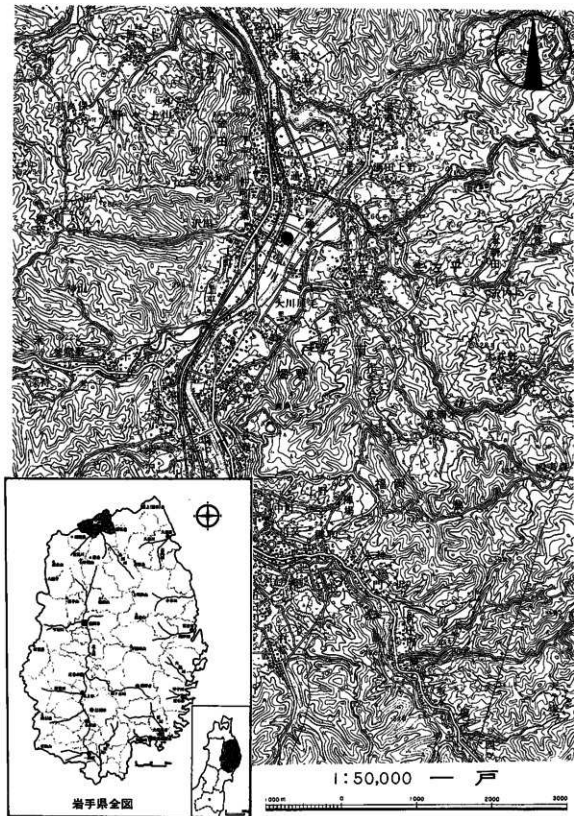
第1図 遺跡の位置図	2
第2図 地形分類図	4
第3図 周辺の遺跡配置図	6
第4図 基本順序	9
第5図 スクリーントーンの表し方	10
第6図 調査区及びグリッド配置図、 周辺の地形図	11
第7図 遺構配置図	13・14
第8図 1号竪穴住居跡(1)	16

第9図 1号竪穴住居跡(2)	17
第10図 1号竪穴住居跡出土遺物	18
第11図 1号、2号土坑	20
第12図 1号、2号陥穴伏遺構	21
第13図 遺構外出土遺物	22
第14図 1号土坑、1号溝	24
第15図 柱穴伏土坑群	25
第16図 遺構外出土遺物	26

写 真 図 版

写真図版1 遺跡遺果、調査区全景	31
写真図版2 1号竪穴住居跡(1)	32
写真図版3 1号竪穴住居跡(2)	33
写真図版4 1号、2号土坑、 1号陥穴伏遺構	34

写真図版5 2号陥穴伏遺構、1号土坑、 1号溝	35
写真図版6 柱穴伏土坑群、基本順序、 調査風景	36
写真図版7 出土遺物(1)	37
写真図版8 出土遺物(2)	38



第1図 遺跡の位置図

I. 調査に至る経過

二戸市金田一字上田面から同市金田一段ノ越に至る総延長3.2kmの一般国道4号金田バイパスの建設は昭和50年に計画着手され、平成8年に完成の予定である。

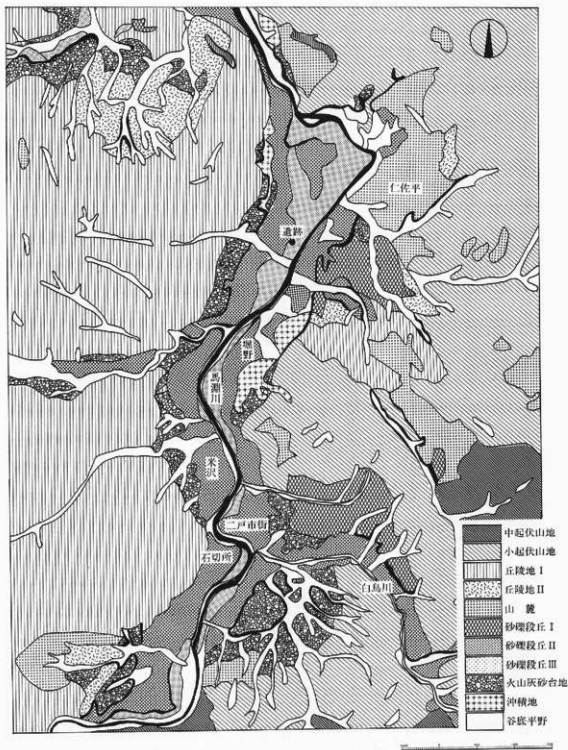
計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての事前協議は建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で昭和53年から行われた。その後、埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼を昭和57年に岩手工事事務所から受けた岩手県教育委員会は分布調査を昭和58年に実施した。その結果、上田面Ⅲ・上田面Ⅱ・荒田Ⅲ・荒田Ⅳ・ハツ長Ⅱ・沖Ⅰ・馬場Ⅱ・馬場・駒焼場・府金橋の10遺跡を確認し、岩手工事事務所へ回答した。ただし、府金橋遺跡については昭和56年にすでに発掘調査に着手し、翌57年も継続調査した。調査主体は磐岩手県埋蔵文化財センターである。それ以降、駒焼場遺跡が昭和61年・62年、馬場遺跡が昭和62年・63年、沖Ⅰ遺跡と馬場Ⅱ遺跡が昭和63年・平成元年、ハツ長Ⅱ遺跡が平成2年、と工事計画に沿った発掘調査が磐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって行われ、調査報告書が刊行されている。

荒田Ⅲ・荒田Ⅳの2遺跡の発掘調査は、平成5年3月1日付け教文第1169号によって磐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成5年度受託事業として計画された。調査面積は荒田Ⅲ遺跡が1,298㎡、荒田Ⅳ遺跡が260㎡で、平成5年8月18日付け委託契約によって発掘調査を開始した。その後、荒田Ⅲ遺跡の調査の進捗につれて遺構が北へ広がることが予想されたため、756㎡を追加調査した。それに伴う変更は平成5年9月13日付け教文第483号で通知された。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡は、二戸市金田一字荒田に所在し、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南南東約1.6kmの距離に位置している。遺跡の所在する二戸市は、盛岡市から北方に約64km、岩手県の北端部にある。二戸市は、1972年に福岡町と金田一村が町村合併して成立し、人口約3万人、面積は238.17㎢である。市の中央を馬淵川が北流し、東北本線と国道4号が南北に縦断している。東側は軽米町・九戸村、西側は浄法寺町・青森県田子町、南側は一戸町、北側は青森県三戸町・名川町と隣接している。馬淵川の河谷を通じて海洋の影響が少なく、年平均気温が約10℃と県北域ながら比較的温暖であり、梅雨期でも降雨日数が少なく、年間降水量925mm(福岡)は県内でも最も少ない地域となっている。河川地域に沿って比較的多く耕地が拓



第2図 地形分類図

けており、耕地に対する水田の割合は2割前後と低く畑地が多く占めている。本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「一戸」(NK-54-18-11)及び2万5千分の1地形図「陸奥福岡」(NK-54-18-11-3)の図幅に含まれ、北緯40度18分18秒、東経141度18分39秒付近にある。

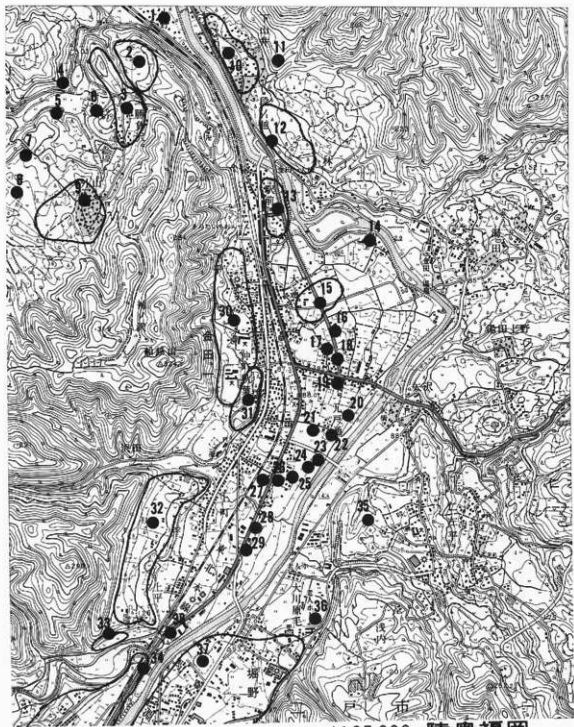
2. 周辺の地形

この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳(標高852m)である。南西の西岳(1018m)、稲庭岳(1078m)より連なる奥羽山脈は、西面にせまる200~300mの丘陵の背後にある。馬淵川は流域面積2050km²、幹線流路延長142kmの河川で、葛巻町袖山に源を発し、一戸町から二戸市域にかけて北上して八戸湾に達している。一戸町北端部の鳥越付近と下山井から三戸町梅内付近はいずれも両側から急斜面をもつ山地のせまる峡谷である。その2つの峡谷の間、石切所から下山井までの馬淵川はゆるやかに曲流し、これに沿う直線距離9kmの区間には最大幅1.5km程度の谷底平野が細長くのびている。

両遺跡をのせる段丘は、馬淵川左岸に形成された完新世段丘の一つであり、松山1981のいう掘野段丘縁部から中曾根段丘に相当する地形面である。松山1981によれば、掘野段丘は馬淵川右岸の矢沢から掘野付近及び杉ノ沢付近と、左岸の下米沢から石切所にかけ分布する。数mの段丘縁層の上に南部浮石層を伴う黒色土層をのせる点では中町段丘と同様であるが段丘面傾斜がやや大きく、また段丘縁と馬淵川面との比高が15~18mと小さいことで異なるとしている。中曾根段丘については、白鳥川河口の対岸と、これに続く下流の東側河岸に曲流する馬淵川にかかえられるように存在し、背後の掘野段丘とは2~3mの高度差で接し、数10m~数mの砂礫層や中環浮石層を含む黒色土層をのせるが、南部浮石層を欠き、段丘面傾斜が大きく、いわゆる滑走斜面としての性格をもっているとしている。遺跡北方の駒焼場遺跡、馬場遺跡から南方の掘野遺跡までは同一の段丘面(掘野段丘面)であり、遺跡周辺の奈良~平安時代の遺跡の多くはその掘野段丘面に立地することが想定される。遺跡の段丘面の傾斜はゆるやかである。標高は86~88mで、馬淵川の川床面との比高は10mほどである。両遺跡の現況は水田であるが、周辺の掘野段丘面は宅地・畑地に、中曾根段丘面は主に水田に利用されている。

3. 周辺の遺跡

住居跡の埋土が十和田a降下火山灰に覆われ、9世紀中に廃棄されたことが想定される住居跡を中心とする遺跡は、中曾根遺跡、中曾根II遺跡、上田面遺跡、長瀬A遺跡、馬場遺跡、米沢遺跡、火行塚遺跡、一戸町上野D遺跡、同町田中4遺跡、浄法寺町飛鳥台地I遺跡などである。県北部ではこの時期のカマドの付設場所は壁中央部から隅よりに変化している。土器ではロクロ使用の坏が出現し、その坏はロクロ不使用の長胴壺とセットになる。ロクロ成形の坏の底部切り離しは、ほとんどが回転糸切りによるものであるが、飛鳥台地I遺跡出土の坏のよう



1:25,000 陸奥福岡



第3図 周辺の遺跡配置図

荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	遺跡・遺物	No.	遺跡名	種別	遺跡・遺物
1	小野	散布地	縄文土器	21	八ッ長Ⅲ	散布地	縄文土器
2	勝負沢Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器	22	八ッ長Ⅴ	散布地	縄文土器
3	勝負沢Ⅲ	散布地	縄文土器、土師器	23	荒田Ⅰ	散布地	縄文土器
4	野々上Ⅱ	散布地	縄文土器	24	荒田Ⅳ	散布地	近世
5	出張	散布地	土師器	25	荒田Ⅲ	集落跡	平安住、土師器、縄文土器
6	勝負沢Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器	26	荒田Ⅳ	散布地	縄文土器
7	野々上Ⅲ	散布地	縄文前期土器、土師器	27	荒田Ⅴ	集落跡	縄文土器、土師器
8	仏畑	散布地	縄文後期・晩期土器	28	上田面Ⅱ	散布地	縄文土器
9	上ノ沢Ⅱ	散布地	縄文前期土器、土師器他	29	上田面Ⅲ	散布地	縄文土器
10	下山井	散布地	—	30	四戸城	館跡	—
11	下山井館	館跡	—	31	館	散布地	縄文土器、土師器
12	段ノ越	散布地	—	32	上町	集落跡	—
13	駒焼場	集落跡	縄文柱、奈良・平安住、土師器、須恵器、鉄器	33	海老田	散布地	縄文土器、土師器
14	大釜	散布地	縄文土器、土師器	34	長瀬D	集落跡	縄文晩期土器、奈良住居跡
15	馬場	集落跡	奈良・平安住、中世住、土師器、縄文土器	35	戸花	散布地	縄文晩期土器
16	馬場Ⅱ	散布地	陥穴状遺構、土師器	36	大川原毛	散布地	—
17	沖Ⅱ	散布地	縄文	37	堀野能群	集落跡	古墳、調杖列石、奈良住居跡、
18	沖Ⅰ	集落跡	中世住居跡、縄文土器、石皿、土師器			祭祀跡	兼手刀、土師器、縄文土器
19	八ッ長Ⅱ	集落跡	中世住居跡、縄文土器	38	上田面	集落跡	平安住、縄文早期土器、土製勾玉
20	八ッ長Ⅳ	散布地	縄文土器				

に、静止糸切りによるものも存在する。10世紀前半代と想定される遺跡は、中曾根Ⅱ遺跡、一戸町北館B遺跡、浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡である。それらの住居跡は、埋土に十和田a降下火山灰をブロック状に混入する。坏にはすべてロクロが使用され、内面を黒色処理しないものも現れる。坏の外面に再調整が施されなくなるのもこの時期である。甕はロクロ不使用だが長胴甕の口縁部が短く屈曲するようになる。10世紀後半以降の遺跡には駒焼場遺跡、一戸町子守A遺跡がある。駒焼場遺跡からは五所川原窯製の須恵器（長頸甕）や内外面無調整土師器の坏が出土している。この時期でも、土師器甕にはロクロを使用しない傾向がある。また、駒焼場遺跡からは、集落を囲む大溝跡4条が検出されている。それは10世紀後半～11世紀代の遺構と推定され、この地域の平安後期の集落の在り方、社会状況を想定する資料となっている。

本遺跡周辺の奈良～平安時代の遺跡は、主に馬淵川に沿う低位段丘面、特に堀野段丘面の段丘縁辺部に立地する傾向にある。8世紀から9世紀前半にかけての遺跡は相対的に多く、10世紀以降の遺跡数は減少する傾向があることはこれまで指摘されてきた。例えば高橋1985では、9～10世紀の馬淵川中流域では1遺跡あたりの住居数が前の時期と比べ極端に減少することを指摘している。しかし、それはこの地域における極端な人口の減少を意味するのではなく、より高い中位段丘や丘陵地への集落・住居の進出を意味すると思われる。また、他地域と比べ焼失住居跡が多いこともこの地域の特色となっている。これらの事実は『日本後記』の記述にある811年（弘仁2年）の文屋總磨呂の爾薩体・幣伊勢力に対する「征夷」との関わりが考え

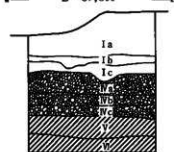
られる。この地域では、9世紀代までに建郡された北上川流域地域とは様相の異なる「蝦夷」的な独特の物質文化を営んでいたと想定される。一方、この地域においてロクロ成形の土器出現の時期は他地域と大きな差は考えられず、むしろ馬淵川下流域・津軽地方・米代川流域との交流を想定することができ、土器製作技術の系譜はそれらの影響下にある可能性が高い。

4. 基本層序（第4図、写真図版6）

荒田Ⅲ遺跡と荒田Ⅳ遺跡は、標高約78mの連続する段丘面に位置する遺跡である。西側が堀野段丘面、中央部から東側が中曾根段丘面にそれぞれ立地するため、土層確認地点を荒田Ⅲ遺跡が第6図のA・B地点、荒田Ⅳ遺跡が第6図のC地点とした。但し、荒田Ⅲ遺跡B地点のⅡ・Ⅲ層は、調査区東側において水田開田あるいは耕作によって攪乱をうけ、V層段丘構成層上面が表土層の直下にくる。荒田Ⅳ遺跡ではⅡ層の残存状態は比較的良好であった。十和田a降下火山灰は層位としては形成されず、住居跡埋土の中のみ観察された。中環浮石下層のⅣ層腐植土は約5000～9000年前に形成された土層であるが、この層位からの明確な遺物の出土はみられなかった。一方中環浮石上層に想定される腐植土は、攪乱のため残存せず表土中に混入している。堀野・中曾根両段丘面のV層はほぼ同一の在り方をしている褐色風化火山灰層（ローム層）で、南部浮石堆積直前当時の地表面である。この面は馬淵川流域の氾濫原であり佐瀬1990によれば、南部浮石により一気に埋没保存された「化石氾濫原」の性格を有する。南部浮石上面には水性作用による再堆積・洪水等による浸食が若干観察され縄文前期前半まで居住に適さないことを示す。

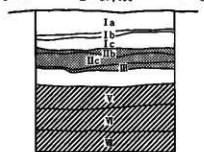
荒田III遺跡A地点

L = 87,800



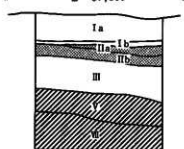
荒田III遺跡B地点

L = 87,400



荒田IV遺跡C地点

L = 87,500



荒田III遺跡

A地点 畑野段丘面

- I層 黒色～暗褐色系の表土で水田の耕作土である。シルト質。層厚約40～60cm。
 Ia層 10Y R2/1 黒色土、腐植土、水田耕作を原因とする酸化鉄分が若干混入する。
 Ib層 10Y R3/1 黒褐色土、酸化鉄分が床土状に混入し、凝固している。
 Ic層 10Y R3/3 暗褐色土、酸化鉄分が若干混入。南限浮石が粒状に混入する。中央の南限浮石層上面が水田耕作等により侵食を受けたためである。
 IV層 南限浮石層、IV層上面が凝積状出面である。層厚約50cm。
 IVa層 10Y R4/4 黒色土、南限浮石起源の腐植層。10Y R3/3 暗褐色土が混入する。水田耕作による酸化鉄分が伏下し混入する。
 IVb層 7.5Y R4/6 黒色土、南限浮石層。2～4cmの粒状である。
 IVc層 10Y R 7/6 明黄褐色土、南限浮石起源の腐植層。粗層のロームが混入する。
 V層 10Y R4/8 褐色土、段丘崩成層最上位のローム層。粘性がありよくしめる。層厚約20cm。
 VI層 10Y R3/4 暗褐色土、段丘崩成層中位のローム層。細砂・シルトが混入する。

B地点 中層段丘面

- I層 黒色～黒褐色系の表土で水田の耕作土である。シルト質。層厚約40～60cm。
 Ia層 10Y R2/2 黒褐色土、腐植土、シルト質。
 Ib層 10Y R2/2 黒褐色土、酸化鉄分が床土状に混入し、凝固している。
 Ic層 10Y R2/1 黒色土、シルト。中限浮石が粒状に混入する。
 II層 中限浮石を主体とする層である。上位の水田耕作に影響で低位面でも層厚が薄くなった。失われてしまっている所がある。調査区東側では中限浮石層は認められず、I層に粒状に混入するのみである。基本的にこの上面が凝積状出面である。
 IIa層 10Y R3/3 暗褐色土、中限浮石起源の腐植層。10Y R3/2 黒褐色土が若干ブロック状に混入する。水田耕作の影響を受けている。
 IIb層 10Y R7/6 明黄褐色土、中限浮石層。ブロック状に黒褐色～暗褐色系に色調変化している所がある。
 IIc層 10Y R2/1 黒褐色土、中限浮石起源の腐植層。粗層のロームが混入し粘性をもつ。
 III層 10Y R2/1 黒色土。中限浮石降下以前の田産土と思われる。ローム質でシルトが混入する。粘性としまりがある。上位部に中限浮石が粒状に若干混入し、下位部によくはねに粘性・しまりを増す傾向がある。層厚約20cm。
 V層 10Y R3/3 暗褐色土。段丘崩成層最上位と思われるローム層。よくしまり粘性がある。中限浮石層が失われている調査区の東側ではこの上面が凝積状出面である。層厚約20cm。
 VI層 10Y R2/3 暗褐色土、段丘崩成層上位のローム層。比較的しまりがあり、粘性がある。層厚約30cm。
 VII層 10Y R4/3 明黄褐色土。段丘崩成層中位のローム層。細砂・シルトが混入する。

荒田IV遺跡

C地点 中層段丘面

- I層 黒褐色系の表土で水田の耕作土である。調査区全域に認められる。層厚約30～40cm。
 Ia層 10Y R2/2 黒褐色土、腐植土。シルト質。中限浮石が粒状に混入する。
 Ib層 5Y R4/6 赤褐色土。酸化鉄分が床土状に混入し、固くしめる。
 II層 中限浮石層。上位面が凝積状出面となる。層厚約20～35cm。
 IIa層 10Y R6/4 明黄褐色土。0.5～1cm程度の粒状の中限浮石層。10Y R2/1 黒色土が若干混入する。
 IIb層 10Y R2/3 黒褐色土。II層との新断面で10Y R6/4の中限浮石層をブロック状に含む。
 III層 10Y R3/1 黒褐色土。中限浮石降下以前の田産土を構成する腐植土。比較的よくしまり、粘性に富む。南限浮石を粒状に含む。
 V層 10Y R3/2 黒褐色土。段丘崩成層中位のローム。シルト層。10Y R1.7/1 黒色土を若干含む。
 VII層 10Y R4/4 褐色土。段丘崩成層上位のローム。シルト層。細砂を若干含む。

第4図 基本層序

Ⅲ. 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査区は北東～南西方向に細長く、荒田Ⅲ遺跡と荒田Ⅳ遺跡は100m程離れているが、共通のグリッド設定を行った。グリッド設定は平面直角座標第Ⅹ系を利用した。

基準点1 X = 33980.000 m、Y = 40600.000 m、H = 87.132 m

基準点2 X = 34080.000 m、Y = 40650.000 m、H = 87.340 m

基準点1の基準杭から延長して4×4mのメッシュで区割りを行った。そして、北から南方向は1・2・3…の番号を付し、西から東方向にはA・B・C…のアルファベットを付して、このメッシュを北西からA-1、B-2と呼称した。

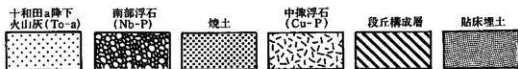
(2) 発掘調査と実測・写真撮影

遺構検出面までの深さ及び層序の確認のため、数カ所に小規模なトレンチを入れた。この結果、荒田Ⅲ遺跡では水田による攪乱・削平により中層浮石層が失われている部分が多く、Ⅱ層まではほとんど遺物を混入させないことから重機を使用した。荒田Ⅳ遺跡については遺構検出面まですべて人力により掘り下げた。更に荒田Ⅲ遺跡の調査区北西隅で住居跡が検出されたことで、北方へトレンチ状に調査区を拡張した。住居跡や土坑類の平面・断面実測は1/20、カマドや遺物の出土状況は1/10の縮尺で平面・断面実測図を作成した。写真撮影は35mm判カメラ2台(モノクロ・カラーリバーサル)と6×7cm判カメラ(モノクロ)を使用した。なお、全遺構の精査が終了した段階で飛行機による空中写真の撮影を行った。

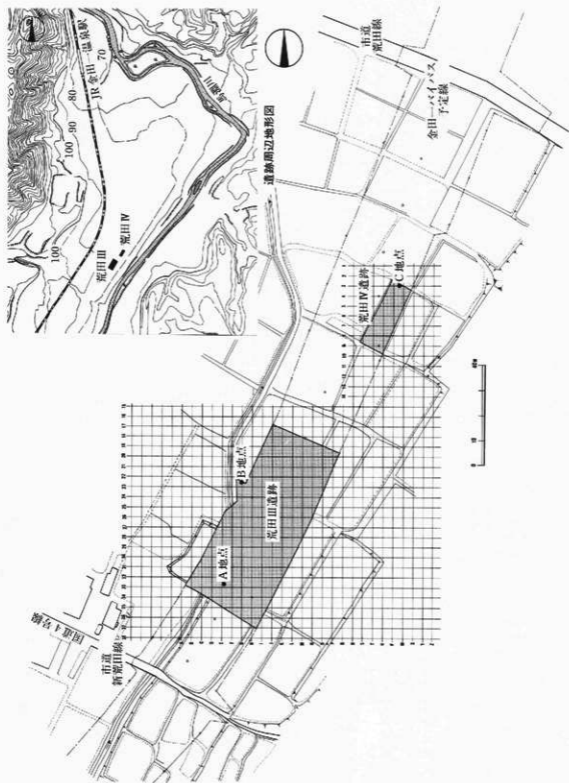
2. 室内整理

室内での作業は、野外調査で作成した遺構図面の点検と補正・第2原因の作成及びトレース遺物の実測・トレース、遺構写真の整理と遺物写真撮影と整理、図版・写真図版の作成を行った。撮影した写真は、ネガアルバムにベタ焼き写真と一緒にして収納した。収納した各アルバムは各ページ毎に連番号を付し、報告書にはその中から選択して使用した。

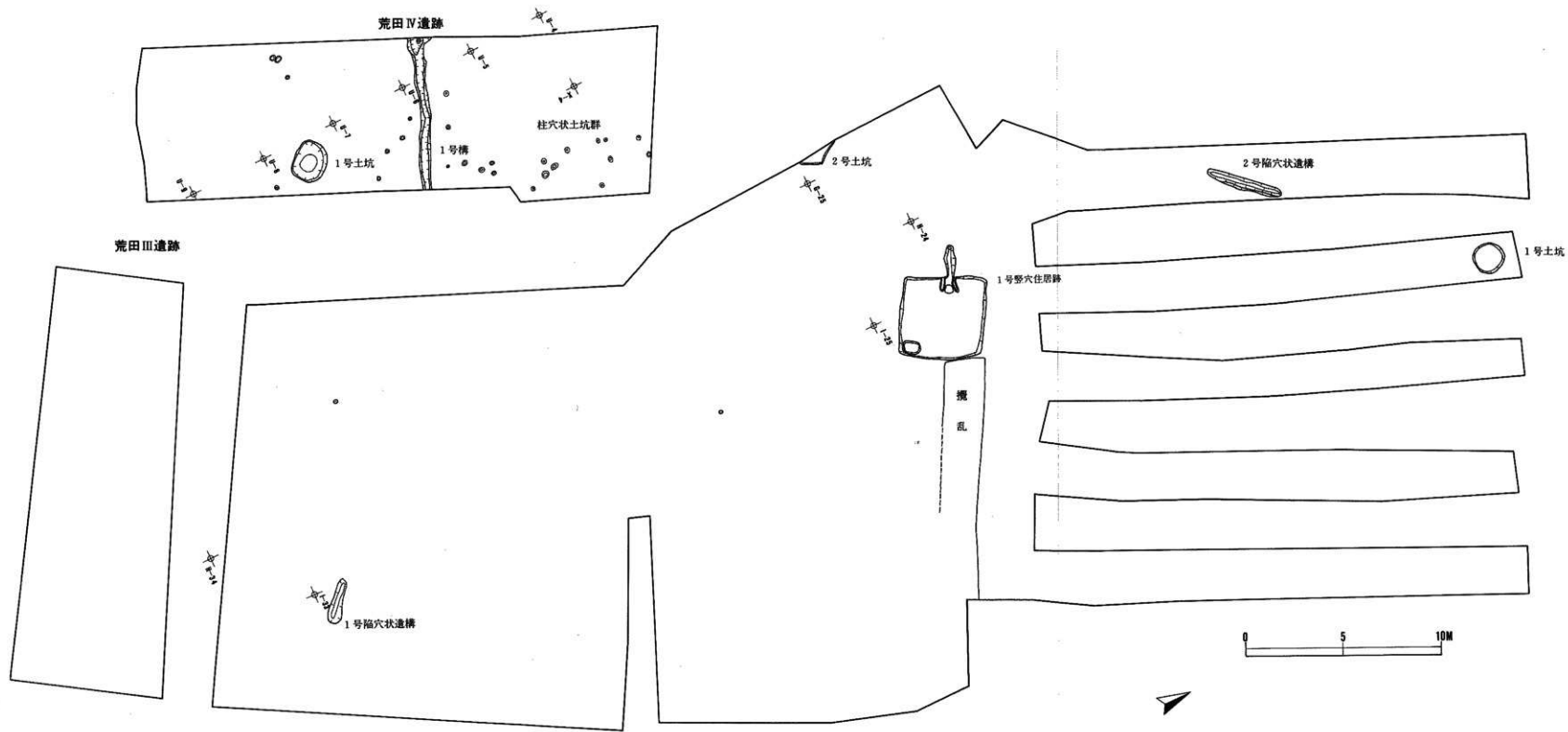
遺構・遺物図版にはそれぞれスケールを付した。遺物は実測可能なものはすべて掲載した。写真図版の縮尺は、空中写真及び遺構は不定である。遺物については、荒田Ⅲ遺跡の遺物は、1/3、荒田Ⅳ遺跡の遺物は1/1で掲載した。



第5図 スクリーントーンの表し方



第6図 調査区及びグリッド配置図、周辺の地形図



第7図 遺構配置図

IV. 検出された遺構と遺物

1. 荒田Ⅲ遺跡

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、縄文時代の陥穴状遺構2基、時期不明の土坑2基である。出土遺物は土師器杯・甕、縄文土器片、近世～近代の陶磁器片である。

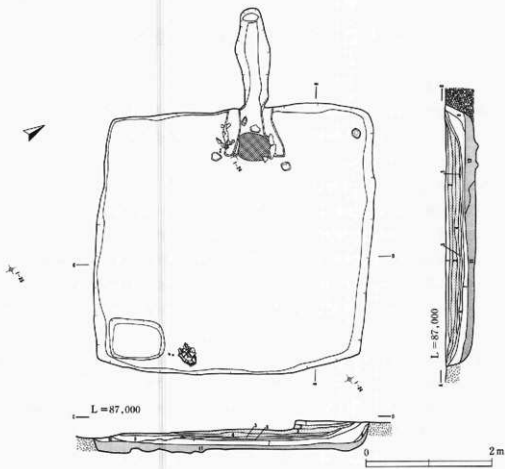
(1) 1号竪穴住居跡

〔遺構〕(第8図・第9図、写真図版2・3)

本遺構は調査区中央部西側にあり、西半部が南部浮石をのせる面、東半部が中環浮石をのせる面に位置する。西半部は中環浮石をのせない畑野段丘相当面であり、東半部は南部浮石をのせない中曾根段丘相当面であることが推定され、本遺構は畑野段丘相当面の段丘縁辺部に位置することが考えられる。なお、遺構の検出は住居跡埋土の十和田a火山灰の堆積の隅丸形状の広がりにより確認した。平面形は概ね完全な形で残存しているが、住居跡上面は水田耕作により削平されている。

平面形は約4×4mの隅丸形状の形態をなし、軸線から約45°の傾きをもつ。壁高は約30cmで、壁は掘り込んだ土の関係でやや外傾ぎみに立ち上がる。埋土は、自然堆積によるものである。層厚約20cmのレンズ状の十和田a火山灰層は少なくとも3度にわたる水性堆積が観察された。埋土断面の状況からみて、西側のより高い段丘面に降下した火山灰が流入したものと考えられる。十和田a火山灰の堆積時期は、それ以前の住居跡の埋土の状況からみて、当住居跡廃棄からの時間差は大きいとは思われない。床面はほぼ平坦であるがたく叩きしめられている様子はなく、10～15cmの厚みをもって構築されている。床面埋土には南部浮石が粒状に混入する。床面からは周溝や柱穴は検出されなかった。西半南部浮石層、東半Ⅲ層の掘り方面には多くの凹凸があり、楔形の鋤頭等の工具痕跡が若干みられた。また、住居跡南側の床面には平面形約90×60cm・深さ10cm程の窪みが掘られていたが、貯蔵穴にしては浅すぎ、その性格及び使用形態は不明である。

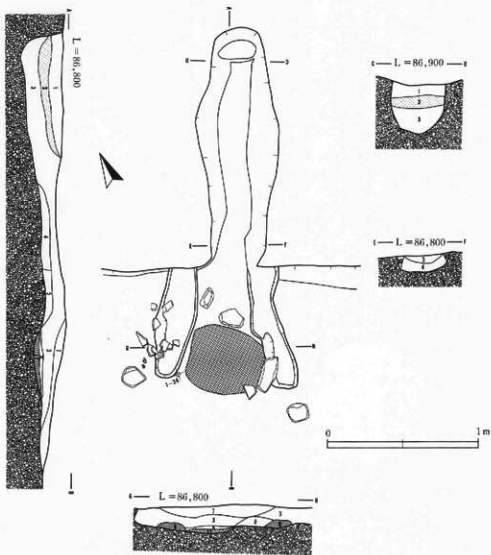
カマドは、北西壁の中央からやや北よりに位置しており、全長約250cmを計る。煙道部の深さは約30×20cm、燃焼部は平面形が約50×45cm楕円形である。焼土面の厚さは、約4～2cm程である。なお、この焼土の上から獣骨片が出土した。支脚は残存しない。袖部はオリーブ黄色粘土を固めたもので構築されており、両袖の粘土の上部は1/2ほど失われていることが考えられる。袖部上部の粘土は燃焼部に一部崩落していた。両袖から南東へ約30cm離れた床面に約20cm大の玉石が置かれており、カマドとの関係が考えられるが性格は不明である。煙出し部は約40×20cmの楕円形であり、煙出し部を中心にレンズ状に十和田a火山灰が堆積し、他



○1号住居跡

- 1層 10Y R2/1黒色土, To-a, フロック・地状に少量混入する。
- 2層 5Y R6/2灰白色火山灰層 (To-a), フロック・地状に黒色土多量混入。
- 3層 5Y R6/2灰白色火山灰層 (To-a), 黒色土塊状に少量混入。
- 4層 5Y R6/2灰白色火山灰層 (To-a), 黒色土塊状にやや少量混入。
- 5層 10Y R2/1黒色土, To-a粒状に微量混入。
- 6層 10Y R2/1黒色土, To-aのフロックが部分的に混入する。
- 7層 10Y R1.7/1 黒色土, 灰化物少量混入。
- 8層 10Y R1.7/1黒色土, 南部浮石少量混入。
- 9層 10Y R1.7/1黒色土, To-aフロック少量混入。
- 10層 10Y R3/2黒褐色土, 中部浮石少量混入。
- 11層 10Y R3/1黒色土, 粘性あり, ややしめる。 [床面]
- 12層 10Y R1.7/1黒色土, 粘性あり, ややしめる, 南部浮石粒状に少量混入。

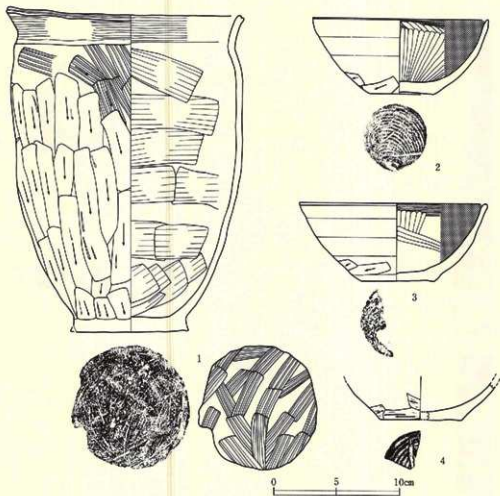
第8図 1号竪穴住居跡(1)



○1号住居カマフ

- 1層 10Y R2/1黒色土、南部浮石粒少量混入。
- 2層 7.5Y 7/3淡黄色火山灰層、To a火山灰、黒色土繊維状に混入。
- 3層 10Y R3/△黒褐色土、南部浮石、To a火山灰粒状に少量混入。
- 4層 7.5Y 6/3オリーブ黄粘土、炭化物、黒褐色土少量混入。
- 5層 7.5Y 6/3オリーブ黄粘土、一部火熱を受け、2.5Y R3/3暗赤褐色を呈する。
- 6層 2.5Y R5/8明赤褐色地上、炭化物少量混入、骨片粒少量混入。
- 7層 10Y R3/1黒褐色土、To a火山灰多量混入。
- 8層 7.5Y 6/3オリーブ黄粘土、黒褐色土多量混入。
- 9層 7.5Y 6/3オリーブ黄粘土、かまどまで、黒褐色土少量混入。
- 10層 2.5Y R4/2灰赤色土。
- 11層 2.5Y R5/8明赤褐色土。

第9図 1号壑穴住居跡(2)



番号	種類	品類	法量(推定値)			内面調整			外面調整			皮影	切り端し	その他	
			口径cm	底径cm	高さcm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
1	土師器	長頸壺	29.2	9.8	25.6	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	-	-
2	土師器	丸	14.1	5.2	6.0	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	ヘラナデ	-	ヘラナデ	ヨコナデ	内面黒色処理	
3	土師器	丸	14.5	5.5	6.7	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	ヘラナデ	-	ヘラナデ	ヨコナデ	内面黒色処理	
4	土師器	丸	-	16.0	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	ヘラナデ	-	ヘラナデ	ヨコナデ	内面黒色処理	

第10図 1号竪穴住居跡出土遺物

の煙道部には堆積していなかった。十和田a火山灰の堆積の在り方と、上部が削平されていると予想されるにもかかわらず深い煙道部の形態からみて、くり抜き式による構築と考えられる。

〔出土遺物〕(第10図、写真図版7・8)

床面から単完形の土師器の坏2点、完形の土師器の甕1点、埋土下層(十和田a火山灰の下

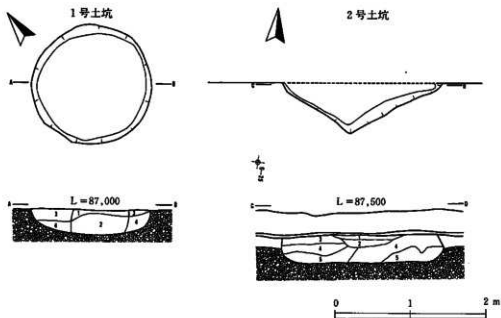
層)から土師器の坏の破片が出土した。第10図2の坏は住居跡北隅から2/3完形のまま出土したが、その他の部分は出土しなかった。ロクロ成形、底部の切り離しは回転糸切りで、内面を黒色処理している。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反気味である。内面調整は、上半部ヨコナデ後ヘラミガキ、下半部はヘラミガキを行っている。ヘラミガキは底部から口縁部へ放射状に広がる調整である。外面調整は、底部側面に横方向へ手持ちヘラケズリ調整を行っている。また、ロクロナデ痕が比較的明瞭である。碗型で底径が小さな坏である。第10図3の坏は、カマドの袖付近に散らばるようなかたちで出土した。これもロクロ成形、切り離しは回転糸切りであり、内面を黒色処理している。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反気味である。内面調整は、口縁部周辺のヨコナデ後、放射状のヘラミガキ及び横方向のヘラミガキを行っている。外面は比較的明瞭なロクロナデ痕があり、底部側面を横方向へのヘラケズリ調整を行っている。第10図1の長胴甕は、住居跡東側で完形のまま埋土に押しつぶされるような形で出土した。成形にはロクロは使用していない。体部はゆるやかなふくらみをもつ。体部と頸部の間に段が認められる。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部先端に沈線が入る。内面調整は、体部が横方向のヘラナデであり、口縁部～頸部はヨコナデ、底部には調整は行われていない。外面調整は、体部がハケメ後上から下へのヘラケズリ、口縁部～頸部はヨコナデ、底部はヘラケズリが行われている。第10図の4の坏(底部)は、住居跡東端部の埋土7層中から出土した。1個体の坏を形成すると思われるが細かな破片のため復元はできなかったため、底部のみを実測し掲載した。ロクロ成形、切り離しは回転糸切りで、刻線が入る。外面底部側に手持ちヘラケズリ調整を行っている。内面は摩耗のため失われているが、黒色処理を施しているものと思われる。底部は小さく内湾して立ち上がる碗型の器形である。

(2) 1号土坑(第11図、写真図版4)

本土坑は、調査区北側の掘野段丘相当面に位置し、南部浮石層の上面で遺構を確認した。平面形は開口部が直径約160cmのほぼ円形を呈し、深さは約35cmである。底部はゆるやかなレンズ状の曲面で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は、黒褐色を呈する腐植土と南部浮石を粒状に混入させた土で構成される。人為的な堆積と考えられるが、出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

(3) 2号土坑(第11図、写真図版4)

本土坑は、調査区西側の掘野段丘相当面に位置する。土坑の半分は調査区域外なので、全体の平面形は不明である。検出面は南部浮石層であるが、土層観察によると酸化鉄降下面の下の層から掘り込まれており、深さは約40cmで、底面はほぼ平坦である。埋土の3～5層は、黒褐色系の腐食土で人為的に埋められている一方、腐植土に南部浮石を多量に混入させる層が存在する。1・2層は3～5層を切っている別遺構の可能性があり、遺物は出土しなかった。水田



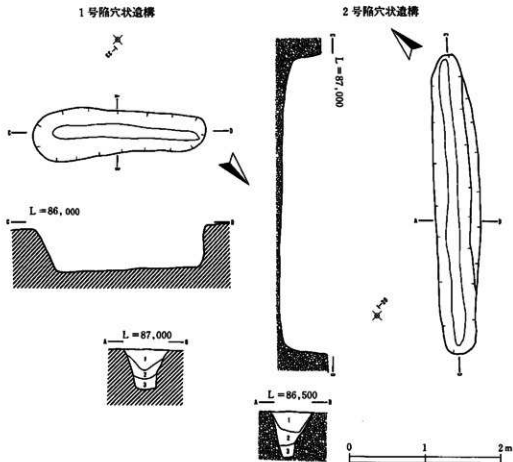
- 1号土坑
- 1層 10Y R2/7黒褐色土、南部浮石粒少量混入。
 - 2層 10Y R2/7黒色土、南部浮石粒多量混入。
 - 3層 10Y R2/7黒褐色土。
 - 4層 10Y R2/7黒褐色土、中層浮石粒少量混入。
- 2号土坑
- 表土 ①10Y R4/1黒灰色、酸化鉄分・ビニール混入。
 ②5Y R4/6赤褐色土、中層浮石粒多量混入、水田の床土。
- 1層 10Y R3/2黒褐色土、中層浮石、南部浮石粒少量混入。
 - 2層 10Y R3/2黒褐色土、中層浮石粒少量、南部浮石粒少量混入。
 - 3層 10Y R2/7黒色土、中層浮石粒多量混入。
 - 4層 10Y R3/2黒褐色土、中層浮石粒少量混入。
 - 5層 10Y R4/4褐色土、南部浮石粒多量混入。

第11図 1号、2号土坑

耕作による酸化鉄降下面の下から掘り込まれているので、水田よりも古い遺構であろう。

(4) 1号陥穴状遺構 (第12図、写真図版4)

調査区南東部に位置し、V層上面で検出した。掘り込みが浅いのは、水田耕作等により上部が削平されたものと思われる。平面形は検出面の長さ約230cm、幅約70～50cmの溝状であり底部の長さ約190cm、幅約15cmで深さは検出面より約60cmである。埋土の大半は、V層起源の崩壊土及びⅢ層の黒色土であるが、1・2層には中層浮石が粒状に混入する。断面形は、15cm程の底部平坦面から外傾気味に立ち上がる。遺物は出土しなかった。埋土に中層浮石が混入していることから、おそらく本来はⅢ層あるいはその上層から掘り込まれたもので、中層浮



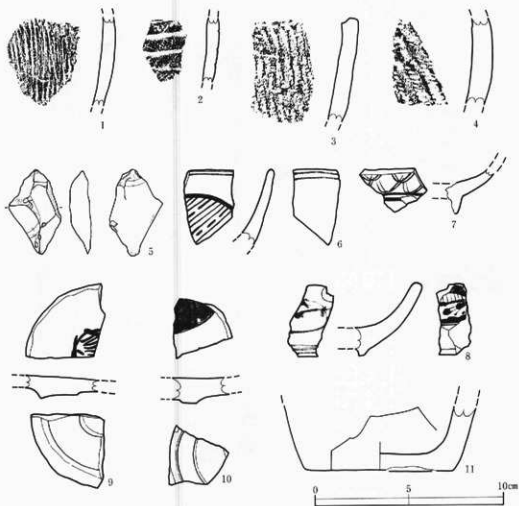
- 1号陥穴状遺構
- 1層 10Y R2/1黄褐色土、中微浮石多量混入。
 - 2層 10Y R2/1黄褐色土、中微浮石少量混入。
 - 3層 10Y R2/2黄褐色土少量混入。
- 2号陥穴状遺構
- 1層 10Y R2/2黄褐色土。
 - 2層 10Y R2/2黄褐色土、粘性あり、砂粒・南部浮石粒少量混入。
 - 3層 10Y R5/3黄褐色土、南部浮石粒多量混入。

第12図 1号、2号陥穴状遺構

石降下(約5000年前)以後の遺構であり、形態的にも縄文時代の遺構であることが推測される。

(5) 2号陥穴状遺構 (第12図、写真図版5)

調査区北西側に位置し、南部浮石層上面で検出した。底部も南部浮石層である。水田耕作等により、上部は削平されていると思われる。平面形は検出面の長さ約400cm、幅約60～50cm、底部の長さ約180cm、幅約15cmで、深さは検出面より約60cmである。埋土は、3層が南部浮石起源の崩壊土であり、1・2層は粘性のある旧表土の腐植土起源の水成堆積による土であ



第13図 遺構外出土遺物

る。埋土には中礫浮石は含まれない。断面形は約30cmの平坦な底面から外反気味に立ち上がる。遺物は出土しなかった。1号陥穴状遺構と直接関係する遺構ではないが、埋土に中礫浮石が混入しないことから、南部浮石降下(約9000年前)以後、中礫浮石降下以前という年代が考えられるが、埋土上部が不明なので確実なことはいえない。

(6) 遺構外出土遺物(第13図、写真図版7)

1と2は縄文時代早期の土器の破片である。1は貝殻腹縁文、2は平行沈線文を主体とするものでありおそらく尖底土器と思われるが、小さな破片のため全体の文様、器形、法量等是不明である。3・4は縄文が施された縄文時代前期の土器の破片である。3は口縁部が残存し、4は胴部のみである。これら縄文土器の破片は調査区東側の1号陥穴状遺構付近の表土中から出土した。水田耕作による攪乱を受けているので実際の層位関係はわからない。5は極細粒珪

質凝灰岩の割片である。6～11は近世後半～近代の陶磁器の破片である。特に6～10は染付けの肥前系磁器で、8～10は18世紀後半頃の年代が推測できる碗である。6は丸文が入った飯碗であり、7は二重網目の文様の碗である。9は深皿か鉢の底部の破片で、蛇の目凹形高台がつく。この高台は18世紀以降の特徴である。10は小皿の底部の破片で文様は不明である。9・10は19世紀代のものであろう。7は近現代の壺形の陶器の破片で褐色の施釉がなされている。

2. 荒田IV遺跡

荒田IV遺跡では、土坑1基、溝1条、柱穴状土坑26個が検出された。遺構内の遺物はない。

(1) 1号土坑（第14図、写真図版5）

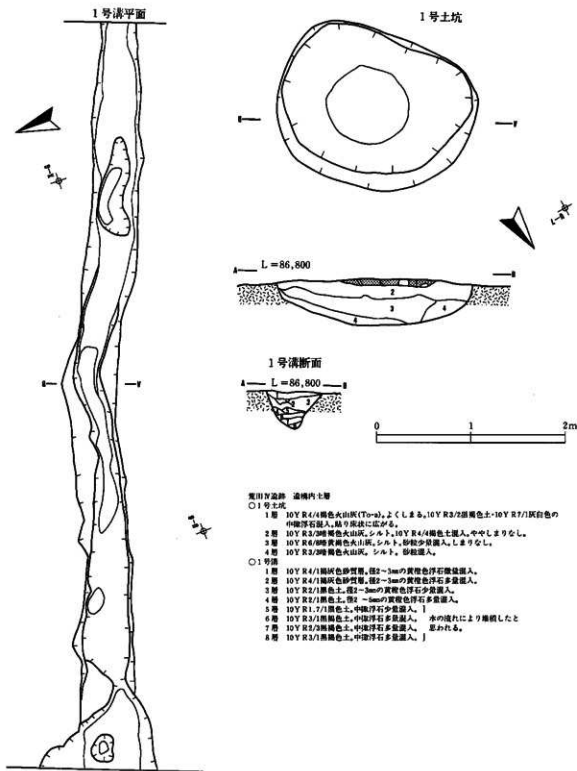
調査区のほぼ中央に位置し、中環浮石面で検出した。平面形は210×165の楕円形を呈する。底部は円形の平坦面があり、そこから内湾気味に壁が立ち上がる形状である。埋土上面には約100cm四方の貼り床状のものがなされていた。それは十和田a火山灰起源の土で非常に固くしまっていた。埋土は人為堆積によるもので、降下火山灰起源の土を多く含み、特に2層は明黄褐色を呈する1～2mmの粒状の浮石であった。壁の崩壊が観察されないことから、土坑を掘った後、長い期間を置かないで一気に埋められたものと思われる。遺物は出土しなかった。本土坑の性格は不明だが、十和田a火山灰起源の土による貼り床とすれば、10世紀以降の遺構であることがいえる。

(2) 1号溝（第14図、写真図版5）

調査区の中央部をほぼ東西に横断する遺跡である。西側は南部浮石面、それより東は中環浮石面の上から検出した。検出した平面の長さは約790cmであるが、更に東西にのびることが予想させる溝である。西から東へゆるやかな傾斜で作られており、全体の1/3は底部が南部浮石面となっている。幅は検出面で約50～60cm、底面は約30～40cmである。深さは検出面より約20～30cmである。埋土は、5～8層が水の流れによる堆積で、中環浮石を粒状に混入させる砂質の土である。1～4層は2～3mmの黄褐色の浮石を混入させる土で、人為的な埋め立てと思われる。底面から鉄釘が3個出土したが、比較的新しいものである。遺跡の立地からして水田に水を供給するための溝（用水路）跡と考えられる。現在の水田とは異なる区画の水田が存在した時の溝であろう。そして、新しい区画を作る際、この溝は放棄され、一気に埋め立てられたのだと思われる。

(3) 柱穴状土坑群（第15図、写真図版6）

調査区北東部を中心に26個の柱穴状の土坑が検出された。Pit 25、Pit 26は南部浮石面、それ以外は中環浮石面から検出した。溝跡の北側に集中する傾向がある。平面形は径が約20cm前後の円形を呈し、深さは約10～15cmである。掘り方は検出されず、木材の腐食の痕跡があるのみで、掘り方なしで柱状の木材を上から打ち込んだものと思われる。また柱穴状土坑群には、



東田N遺跡 遺構内土層

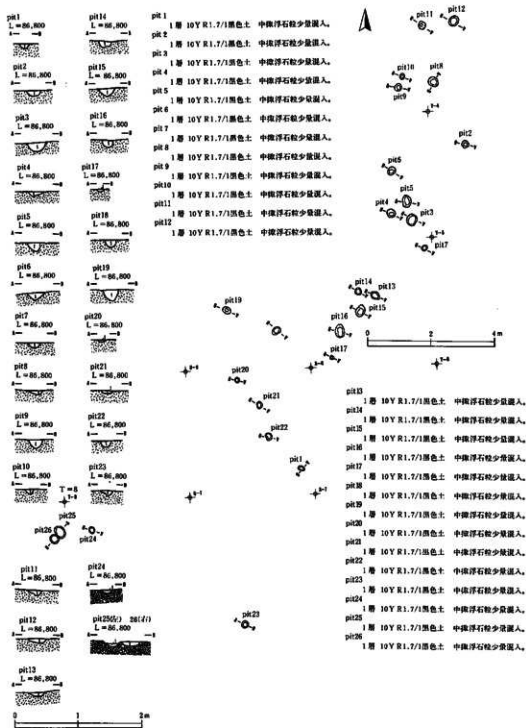
○1号土坑

- 1層 10Y R4/4褐色火山灰(Tp-a),よくしまる,10Y R3/2黒褐色土・10Y R7/1灰白色の中微浮石混入,粘り状に広がる。
- 2層 10Y R3/3暗褐色火山灰,シルト,10Y R4/4褐色土混入,ややしまりなし。
- 3層 10Y R6/8暗褐色火山灰,シルト,砂粒少量混入,しまりなし。
- 4層 10Y R3/3暗褐色火山灰,シルト,砂粒混入。

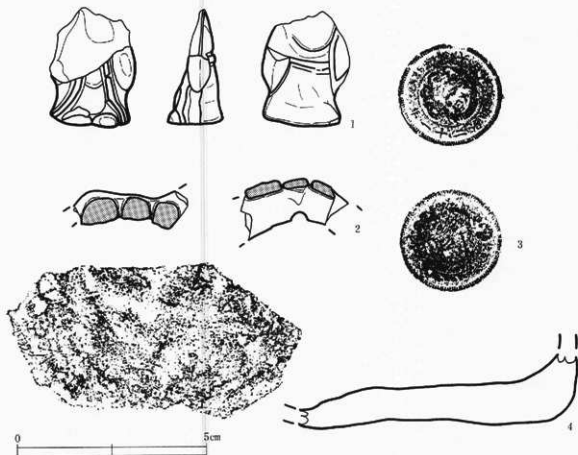
○1号溝

- 1層 10Y R4/1褐色砂質層,径2-3mmの黄褐色浮石微量混入。
- 2層 10Y R4/1褐色砂質層,径2-3mmの黄褐色浮石多量混入。
- 3層 10Y R2/1黒色土,径2-3mmの黄褐色浮石少量混入。
- 4層 10Y R2/1黒色土,径2-3mmの黄褐色浮石多量混入。
- 5層 10Y R1.7/1黒色土,中微浮石少量混入。]
- 6層 10Y R3/1黒褐色土,中微浮石多量混入。水の流れにより継続したと
- 7層 10Y R3/2黒褐色土,中微浮石多量混入。見られる。
- 8層 10Y R3/1黒褐色土,中微浮石多量混入。]

第14図 1号土坑、1号溝



第15圖 柱穴状土坑群



第16図 遺構外出土遺物

建物を構成する配列を見出せなかった。建物の柱だしたら掘り込みが浅く、柱自体も貧弱である。おそらく水田耕作に関わる杭跡の可能性が高いだろう。

(4) 遺構外出土遺物（第16図、写真図版8）

すべてI層表土中からの出土である。1は泥人形の下半部の破片である。素焼きの型取りをした土製品で、前後を型でそれぞれ成形した後、貼り合わせ、焼成したものである。推定高は約4cm、底部長軸2.2cmである。おそらくこの泥人形は七福神の弁財天であり、近世～近代の民間信仰の一形態としての七福神のミニチュアのセットの一部だったと思われる。2は総入れ歯の破片である。右端の歯は糸切り歯の形状なので、上部の左前歯だろう。歯はお歯黒状であり、女性が使用したものと思われる。材質は歯の部分は磨いた黒石状のもので、支えの部分はセルロイド製であると思われる。細い銅製の芯が補強材として入れられている。3は一銭銅貨で「明治二十一年」の銘がある。4は縄文土器で小型の甕形土器の底部の破片である。胎土は砂粒

を比較的多く含むが、焼成は良好である。時期は不明である。

V. まとめと考察

1. 荒田Ⅲ遺跡

検出された1号竪穴住居跡の年代について、若干の考察を試み、まとめとしたい。竪穴住居跡埋土2～4層は十和田a降下火山灰の水性堆積層である。少なくとも3度にわたる堆積の状況から、当住居跡が放棄され、ある程度自然堆積が進行した時点で、住居跡西側の掘野段丘面からの流れ込みであることが推測される。十和田a降下火山灰の時代は9世紀末から10世紀初頭(第1四半期)と考えられている。堆積の状況と火山灰の年代から、当住居跡は10世紀より前の遺構であることは確実である。またカマドは中心から北にずれて構築されており、床面出土のロクロ成形の内黒環の存在から考えて、奈良時代より後の時代の遺構であることも確実であろう。即ち、当住居跡は9世紀代に使用され、放棄されたと解釈できるが、それでは9世紀のどの時期に当住居跡が放棄されたかを考えてみたい。関1982、高田1978では、土師器の環にロクロ成形技法が出現する時期を9世紀中葉～後葉としている。彼らのいうこの時期の環型土器の様相はロクロの環の切り離しは回転糸切りだが、外面下部には手持ちヘラケズリ調整が施され、ロクロ環と非ロクロの環が共存するものである。また、長胴型の成形にはロクロは使用されず、頸部に段状に残るものも多いとしている。一方、宇部1989では「馬淵川下流域の土師器へのロクロ導入の時期も9世紀初頭と一応仮定し、IV群土器の下限を8世紀末葉と想定しておきたい」と述べている。北上川上流域(盛岡周辺)について、八木1981は、9世紀初頭段階の土師器において、環のほとんどと甕の一部がロクロ導入の初期段階という様相であり、ロクロ出現の時期を9世紀初頭としている。即ち、馬淵川下流域と北上川上流域のロクロ出現の時期は9世紀初頭であるのに、馬淵川上流域においては9世紀中葉～後葉と考えられているのである。文屋綿磨呂の「征夷」の記事から、馬淵川上流域は一番遠かった、という解釈も成り立つかもしれないが、前述の宇部1989では「馬淵川下流域と上流域の土器群については、現在、土器変遷の状況に大きな地域差は認められず、ほぼ同一の型式観によって土器を把握することができる」とし、八木1992でも、斯波郡と爾薩体を比較しつつ、馬淵川上流域におけるロクロ出現時期を9世紀初頭に推定している。以上のように、馬淵川上流域におけるロクロ使用土器出現時期については諸説あり、現時点では9世紀代であること以外に確実なことはいえないようである。さて、当住居跡の環は3点とも外面調整はあるもののロクロ、回転糸切りであり、底径が小さいことから、当地方におけるロクロ出現時期から若干の時間的経過は考えられる。ロクロ使用土器出現が9世紀初頭としても、このような属性を有する当住居跡の環

は、9世紀中葉頃と考えられる。ロクロ出現が9世紀中葉～後葉としても、関1982等の分類における属性から逸脱するものではない。共伴する長胴甕からみても妥当であると思われる。以上のことから1号住居跡の放棄時期を9世紀中葉から後半代と推定する。

2. 荒田IV遺跡

表土中から泥人形、入れ箸、一銭銅貨が出土している。どれも溝跡の西北側からの出土である。周辺は水田地帯で、西側の民家は100m程離れているので、現在の民家との関わりは考えられない。これらの遺物は、おそらく当遺跡の北西側周辺に人が住み、民家があった頃のものであろう。そしてその年代は、一銭銅貨の明治21年の銘を参考にすれば、その前後の時期と考えられるのではなかろうか。また、溝跡は水田の用水路と思われる。それは現代の水田の区画とは異なる時期のものと考えられ、柱穴状土坑群は主に溝跡北側から検出されており、溝の北側と南側とでは、場の使い方の相違があったのではないか。出土遺物と溝跡、柱穴状土坑群が同時期に存在したものならば、民家とその水田の関係を想定する若干の資料となるだろう。

【引用参考文献】

- 一戸町教育委員会 (1978): 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書1』, IV
岩手県 (1978): 土地分類基本調査: 一戸、国土調査369。
宇部剛保 (1989): 『青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—』, 『北海道考古学第25号』, 99—120
大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之 (1966): 『馬淵川中・上流沿岸の段丘と火山灰』, 『第四紀研究』第5巻, 29—35
草間俊一 (1970): 『堀野遺跡』, 福岡町教育委員会
佐瀬 隆 (1990): V. 考察とまとめ, 『馬場II遺跡・沖I遺跡発掘調査報告書』, 4817岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
関 豊 (1982): 『馬淵川上流域を中心とした岩手県北部の古代土器の様相』 岩手考古学会資料
高田和徳 (1978): 考察及びまとめ『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I』, 352—371。
高橋信雄 (1982a): 3. 古代, 『岩手の土器—県内出土資料の集成—』 岩手県立博物館
高橋信雄 (1982b): 『東北地方の土師器と古代北海道土器との対比』, 『北奥古代文化』
高橋信雄 (1985): 『岩手の古代集落』, 『日高見園—菊地敬治郎学兄没後記念論文集』
新野直吉 (1986): 6章延暦・弘仁の征夷, 『古代東北史の基礎的研究』, 角川書店
二戸市教育委員会 (1978): 『中曾根遺跡発掘調査報告書』
二戸市教育委員会 (1981): 『中曾根II遺跡発掘調査報告書(本文編・図版編)』
松山 力 (1981): 第二章自然的環境, 『中曾根II遺跡発掘調査報告書』, 二戸市教育委員会
八木光則 (1981): 『志波城跡と周辺遺跡の土器様相』, 『志波城跡I』, 盛岡市教育委員会
八木光則 (1992): 『古代新波郡と爾藤体の土器様相』, 第18回古代城衛官道遺跡検討会資料
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第22, 23, 35, 36, 51, 120, 133, 137, 152集

写 真 图 版

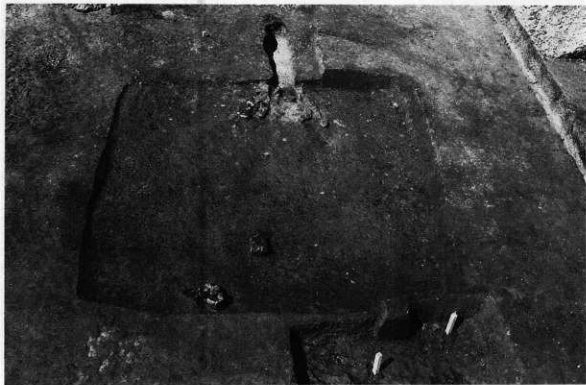


遺跡遠景(東-D)

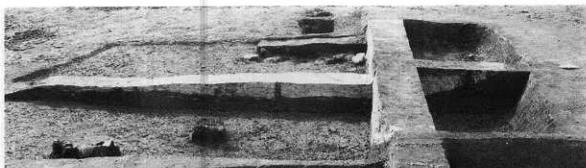


調査区全景(東-D)

写真図版1 遺跡遠景、調査区全景



完掘状況



北東-南西ベルト埋土堆積状態



北西-南東ベルト埋土堆積状態

写真図版2 1号整穴住居跡(1)



煙道部断面



カマド部断面



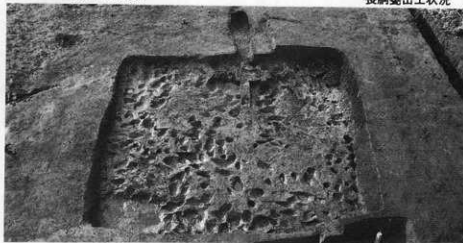
カマド部全景



火山灰検出状況



長胴壺出土状況



掘り方完備状況

写真図版3 1号竪穴住居跡(2)



1号土坑断面



2号土坑断面



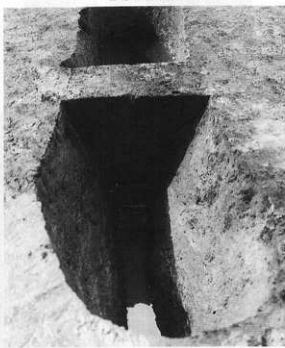
1号土坑全景



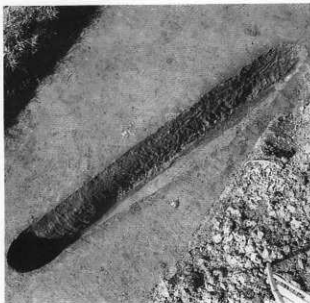
2号土坑全景



1号陷穴状遗构全景



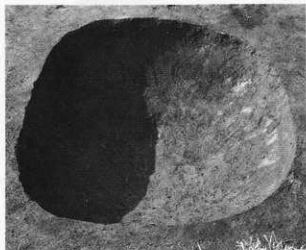
1号陷穴状遗构断面



2号陷穴状遺構全景



2号陷穴状遺構断面



1号土坑全景



1号構全景(東-D)



1号土坑断面

写真図版5 2号陷穴状遺構、1号土坑、1号溝



柱穴状土坑群(北-D)



荒田Ⅲ基本層序(B地点)



荒田Ⅲ基本層序(A地点)

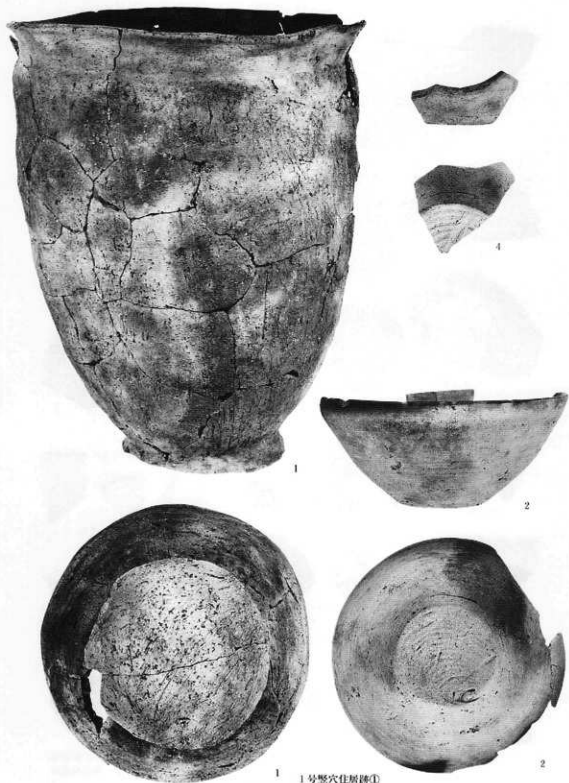


荒田Ⅳ基本層序(C地点)



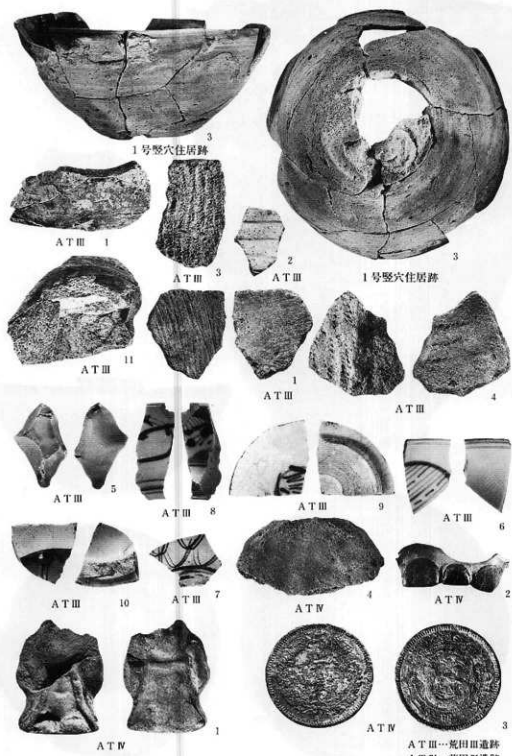
調査風景

写真図版6 柱穴状土坑群、基本層序、調査風景



1 1号墓穴住居跡①

写真図版7 出土遺物(1)



写真図版 8 出土遺物(2)

AT III…灰田III遺跡
AT IV…灰田IV遺跡

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實				
副 所 長	千 葉 政 男				
(管理課)					
管 理 課 長	澤 田 寛	嘱 託	吉 田 十 次 夫		
主 事	佐 藤 理 恵	"	野 崎 他 夫		
"	久保田 幸 恵				
(調査課)					
調 査 課 長	鈴 木 恵 治	文 化 財	松 本 建 速		
課 長 補 佐	三 浦 謙 一	專 門 調 査 員	笹 平 克 子		
"	高橋 與右衛門	"	花 坂 政 博		
主任文化財	菊 池 強 一	"	佐々木 務 彦		
専門調査員	波 辺 洋 一	"	金 子 昭 俊		
"	工 藤 利 幸 紀	"	木 戸 口 篤 史		
"	中 川 重 紀 文 介	"	大 道 部 勝 雅		
"	佐々木 橋 義 俊	"	阿 星 部 雅 直		
"	高 中 村 井 英 宗 孝 雄	"	羽 高 木 上 拓		
文 化 財	酒 千 葉 池 人 見 格	"	高 村 高 杉 沼		
専門調査員	伊 東 充 雄	"	高 杉 沼 田 精 造		
"	吉 田 邦 浩 勉 透	"	田 田 英 樹 一 宏		
"	斎 藤 一 浩 勉 透	期 限 付	鎌 田 高 佐 稻 田 元 熊 佐 千 沼 後	專 門 職 員	
"	高 橋 田 小 山 内	"			
(資料課)					
資 料 課 長	駒 嶺 高 幸 之				
主任文化財	高 橋 正 之				
専門調査員					

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第217集

荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡第1次発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年11月25日
発行 平成6年11月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡 11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 盛岡市本町通 2-13-8

TEL (0196) 23-3351